

## 蜂屋邦夫『中国の不思議な物語 夢と幻想・寓意譚』

「不思議」という言葉は、正式には「不可思議」といい、「思（心に思うこと）」や「議（考えること）」ができないという意味である。心霊現象や正夢、既視感（デジャヴ）など、科学では証明できないようなことが、この世界にはあふれている。ちよつとした不思議な体験をしたことがある人は少なくないだろう。また、そのような事象に興味を持っている人も少なくはないはずだ。古代中国にもそうした不思議な物語や伝説が数多く作られ、現在まで残っている。本書に収められている物語および、伝説のほとんどは唐の時代までに書かれたもの、伝承されたものであり、非常に魅力的である。代表的な作品はもちろん、著者の選りすぐりの不思議な、奇妙な物語が収録されている。

本書には、二十六話の不思議な物語や伝説が、「夢の寓意」、「仙人の物語」、「愛の奇跡」、「奇妙な事件」、「恐ろしい話」の五つの分けられて収められている。タイトルにも趣向を凝らしており、目次を見るとすぐにその頁を開きたくなるに違いない。

それぞれの物語には、その話の原典についての情報や、著者の率直な感想、あるいは簡単な解説が付け足されている。また、日常あまり使われないようなこと

ばが文中にでてきた場合には端的にそれを説明しており、難しい注釈や専門的な解説などは一切無い。そのため、作品そのものを一読して理解でき、物語の世界にごく自然に入り込むことができるのが、本書の長所の一つである。他の類書を読んでもわかるのだが、著者の訳は非常に素直である。つまり、本文に忠実に脚色などがほとんどされていないのだ。それにも拘わらず、一読で理解できるものであることから、著者の訳の腕前は非凡ではないことがわかる。

中国に、不思議な夢に関するとても有名な話がある。莊子の「胡蝶の夢」である。本書では、この「胡蝶の夢」を導入に用いている。ここで、この話の概要を示そう。

莊周はあるとき、胡蝶となつてひらひらと楽しく宙を舞う夢を見た。とても気分がよく楽しかったので、自分が莊周だということを忘れていた。しかし、目覚めてみるとそれは間違いなく人間の莊周であった。莊周は考えた。考えているうちにわからなくなつた。自分はずいぶん夢のなかで胡蝶となつて、宙を舞っていたと思っているが、もしかするとこの自分が夢のなかの存在で、胡蝶が莊周となつている夢を見ているのかもしれない、と。

この話で暗示されていることについては、様々な議

論がなされているが、著者は次のようにいう。

それは、胡蝶だというなら胡蝶として生きればいいし、莊周だというなら莊周として生きればいい、ということであろう。つまり、現実も過ぎ去ってみれば夢のようであるし、逆に夢の中で現実を体験したように思うこともあり、現実と夢との境界はあいまいであるから、そのときどきのありかたを、「その「物」として充実に生きればよい、ということであろう。

本書の導入では「胡蝶の夢」が暗示していることを読者に説明するためにもう一つ、罔両（影のふちにできるぼんやりとした影）と景（影）の話を紹介している。この話の内容を次に示す。

あるとき罔両が景に尋ねた。「どうして君はそんなに形のなすがままにしか動けないのか」と。景は「君は僕が何か依存するものがあつてそうしているというのか。もしそうであるなら、僕が依存しているものにも何か依存しているものがあるというのか。しかし、僕はわからないのだ、なぜそうであるのか、あるいは、なぜそうであるのか。」と答えた。ものはものに依存していて、常識のうえでは、その依存関係（因果関係）は果てしなく続いている。しかし、景にとつて大切なことは、形との関係ではなく、自分が自分として

存在することなのである。つまり、自分が存在するには、依存するものがあつてもなくてもいいのである。簡潔にまとめるとするならば、「胡蝶の夢」とこの話の関連性は、自分という存在の曖昧さへの言及であろう。先が気になつて読み進めたくなるような面白い作品の中に、様々な深い寓意を込めている。

中国の有名な「夢」に関する古典を導入に用いた点は、著者の研究内容が反映されている。著者は、中国思想史の研究者であり、老子や莊子の研究を行っている。ここで、「不思議な夢・伝説」をテーマとした著者の意図が覗われる。著者は、古い中国の物語を軸として、読者にその不思議な感覚を以つて、当時の中国の思想における文化を伝えようとしている。本書はそのような思いから著されたと言えるだろう。

「中国古典文学」といわれると、興味も湧かず、手も出せない人も多いだろう。しかし、本書を一度手にとつて読んでみていただきたい。必ずや、その不思議な夢の世界にいざなわれることだろう。